

『草の根研究会会誌』第3号 合評会（第38回例会）

2025/12/6 @文京シビックセンター
由谷 裕哉

1

本プレゼンの構成

- 1) 拙稿「中野重治「秋の一夜」におけるレッド・ページと故郷の表象」に関する自己コメント
- 2) 北見継仁(編著)『知られざる佐渡の郷土史家・蒐集家 青柳秀雄の生涯とその業績』(皓星社)を巡って
Takashi Kamikawa氏による同書「書評」へのコメントではなく、同書そのものへの疑問点と代案の提示

2

1) 拙稿「中野重治「秋の一夜」におけるレッド・ページと故郷の表象」に関する自己コメント

- 同作(1954年発表の短編)について、先行する言説が目した中野と魯迅との関わりや、作中での檜物というキャラクターの演説における日中戦争に対する戦後日本人の反省の無さ、から視点をずらそうとした。
- しかし、中野の戦前の作品(小説、評論)にまで目配りしたため、二つのテーマ“**レッドページ**”と“**藤野先生**”のうち、とくに前者が含まれる(中ソ対立前の)**冷戦体制**、という問題枠組を明確にしえなかった。
- 将来的に、**冷戦体制下**という枠組を加えて改稿できたら。

3

2) 北見継仁(編著)『知られざる佐渡の郷土史家・蒐集家 青柳秀雄の生涯とその業績』(皓星社)を巡って

- 本誌第3号の神川隆氏の書評に導かれるように本書を入手したが、疑問点が多かった。
- とくに、主テーマである筈の青柳秀雄の言説がほぼ引用されないのに、結論部分で彼が郷土史家・蒐集家として「類い希な成果を上げた」(p.179)とされることなど。
- ↳ 前回書評会(2025.6.28)での大野秀彰氏『群馬の郷土史と『上毛及上毛人』-豊国覚堂の時代-』に続き、**郷土研究の生成**と関わる著作であるので、本書そのものを考察したい。以下、疑問点を5つあげてゆく。

4

疑問点1；青柳秀雄(1909-69)と牛窪弘善(1880-1933)との関係について、記載がほぼ無い。

- 牛窪弘善は佐渡生まれ。のち、関東在住。
 - 本書p.14で佐渡市立佐渡学センター「牛窪文庫」に青柳の刊行物が所蔵されている件、p.34で『佐渡郷土趣味研究』への牛窪の寄稿が言及される程度(内容は不詳)。
- 牛窪弘善の主な業績
 - 『日蓮聖人霊場案内』1916
 - 「理源大師及醍醐修験道」1927
 - 『文化史上に於ける役行者』1928
 - 『修験道綱要』1980；{←修験道研究の重要文献}
 - 以上は、NDL-Dでダウンロード可

5

疑問点2；青柳秀雄と青木重孝(1903-1994)との関係についても、記載がほぼ無い。

- 青木は糸魚川出身で、1935-49に佐渡在住。
 - 本書p.164に、1956年とされる青木の「小木半島民俗調査の記」で青柳が触れられることの指摘、などのみ。
- 青木重孝の主な業績；{✓全てNDL-Dでダウンロード可}
 - 『西頸城郡郷土誌稿』1937
 - 『佐渡年中行事』1938(中山徳太郎と共著)
 - 『西頸城年中行事』1941(西頸城郡郷土研究会 銘)
 - 「妙高山信仰」(in『頸南』)1966
 - 『青海町 その生活と発展』1973
 - 『糸魚川市史』1976- (編纂に関わる)

6

因みに...；

- 牛窪弘善『修験道綱要』については；
 - 宮家準『日本仏教と修験道』2019に、詳細な位置づけが。
- 青木重孝の『西頸城郡郷土誌稿』や『佐渡年中行事』などについては；
 - 松本三喜夫『野の手帖』1996に、詳細な位置づけが有る。
 - ↳次スライド参照。
- その他、中山徳太郎(1875-1951)や山本修之助(1903-93)のように佐渡の郷土研究に功績のあった人々についても、牛窪や青木より言及がやや多い程度で、青柳との関係についてはほぼ問題とされない。

7

(参考)；松本三喜夫『野の手帖』(青弓社, 1996)における青木重孝

- 小学校勤務の中で、同郷の相馬御風に私淑。
- 1935の日本民俗学講習会に参加；上京時に購入した『北安曇郡郷土誌稿』に影響を受ける⇒『西頸城郡郷土誌稿』(1936-37)の編纂へ；{1935佐渡へ異動}
- 1936、柳田國男の佐渡を含む新潟県訪問；⇒佐渡における郷土研究の盛り上がり。
- 1938、中山徳太郎(医師)と共に『佐渡年中行事』を編集、発刊。
- 後に(戦後?)、古文書などに依拠する論考が主体に(?)

8

- そもそも、青木重孝、中山徳太郎、山本修之助が、青柳についてどう書いているか、の情報が欠落。
 - **中山徳太郎**については複数の報告記事ないし論考がコピペされているが、青柳絡みではない。
 - **山本修之助**については、青柳に触れているらしき論3点のタイトルと書誌情報がp.6に載るが、内容は紹介されない。
- つまり、青柳秀雄(秀夫)が地元の郷土研究者によってどのように引用・参照されたのか、本書からは全く分からない；
- ↑ 青柳自身の言説も、ほぼ引用されないが...

9

疑問点3；柳田國男『北小浦民俗誌』(1949)について、福田アジオの言説が引用されるのみ(pp.157f.)

- 同書について、索引で立項すらされていない。
- 発表者が「書評－福田アジオ著『種明かししない柳田国男』」(『日本民俗学』317, 2024)で指摘したように、この柳田書については福田2023著書以前に重要な論著が複数有る。
 - 篠原徹「世に遠い一つの小浦」1990.
 - 松本三喜夫『柳田国男の民俗誌－『北小浦民俗誌』の世界－』1998.
 - 福田アジオ(編)『柳田国男の世界－北小浦民俗誌を読む－』2001.

10

『北小浦民俗誌』とは？

- 倉田一郎(1906-47)が、柳田による**海村調査**(1937-39)の一環として1937年に訪れた、**北小浦を含む内外海府に関する「採集手帖」**に基づき、同地を訪れたことのない柳田が倉田の早逝を悼んで後に纏めたとされる。
- 柳田による「全国民俗誌叢書」の第一冊として1949年に刊。
- 北小浦というより、他地との比較考察が主。
 - 全23パートのうち、第10までが漁法、11から14までが村落内部の生産など、15から21までが家や婚姻、相続など、22、23が信仰や年中行事。

11

(参考1) 篠原徹「世に遠い一つの小浦」(『国立歴史民俗博物館研究報告』27, 1990)

- 1920、柳田が両津を中心に佐渡を回遊；⇒「佐渡の海府」1920. + 「佐渡一巡記」1932.
- 1937、**倉田一郎**が**海村調査**の一環として佐渡で2回調査(北小浦滞在の月日は不詳らしい)；⇒採集手帖への書き込み。
- 篠原論は、両者を照合する試みだが、一方で海村調査の時代(1937.5から1939.4)が既に**戦時体制**であり、柳田の姿勢が**民族統合の為の答えを求める**ものであったとする。
- また、本作に見られる農漁不可分な日本海岸の村の成立論は、柳田の「佐渡一巡記」以来の**夢想からの発想**とする。
- ちくま文庫版『柳田國男全集』27の解説でも、同論が言及。

12

(参考2) 松本三喜夫『柳田国男の民俗誌－『北小浦民俗誌』の世界－』(吉川弘文館, 1998)

- 『北小浦民俗誌』を『海上の道』に連なる移住の研究と捉えるが、論証不十分か? ; + 『野の手帖』と一部重なる。
- ただ、第4章「倉田一郎の佐渡の旅」は興味深かった。柳田自身が倉田一郎の“採集手帖”に依ったとしているので、篠原1990論文はそれと『北小浦民俗誌』との対照しかしていなかったが、同章によれば、倉田は1937年の二度の佐渡行きによって他にいくつか報告などを著していた。
 - 「佐渡の漁村」, 『高志路』3-7, 1937.7.
 - 「佐渡に於ける占有の民俗資料」, 『海村調査報告(第1回)』1938.; {←この論と同じ図が『北小浦民俗誌』にも}
 - 『佐渡海府方言集』中央公論社, 1944; {←柳田と共著}

13

- 第5章「旅人の学問・寄寓者の学問」で鈴木棠三の1936年の佐渡への旅に言及している箇所も興味深い。
 - うち、同年4月29日、「小木町小比叡に青柳秀雄を訪問」(p.136)、とある; {cf. 本書p.120には鈴木の来島が記されるが、青柳と対面したことやその日時の記載は無い}
- 因みに本書で他に青柳が言及されるのは、第6章「佐渡「同郷人の学問」」で、『民間伝承』の新入会員リストのうち佐渡の人物について、1935年11月の第3号に青柳秀雄と載ること。
 - 本書(北見編著)p.116にも同じ情報が掲載。
- また第3章「柳田国男の佐渡への旅」のp.74に、1936年7月に柳田夫妻が中山徳太郎の別邸を訪れ、「佐渡の研究者たち」と撮影した集合写真が載っている。写真で柳田夫人の傍に写っている小柄で比較的若い男性が、キャプションで「青柳弘」とされているが、本書の表紙写真の青柳秀雄とよく似ている。

14

(参考3) 福田アジオ(編)『柳田国男の世界－北小浦民俗誌を読む－』(吉川弘文館2001)

- 後半の「第二部 解題『北小浦民俗誌』」に3本論考が付されるが、本書の大半(第一部)は、同民俗誌の本文を引用しつつ、それに注記する部分。
- 注釈には篠原1990年論文のように倉田一郎の「採集手帖」書き込みだけでなく、倉田『佐渡海府方言集』、柳田『明治大正史 世相編』、『神道と民俗学』、『火の昔』、『先祖の話』、『婚姻の話』、『総合日本民俗語彙』、『分類漁村語彙』、『族制語彙』、『婚姻習俗語彙』、『山村生活調査報告書』、青木重孝『佐渡年中行事』、江馬三枝子『白川村の大家族』、山本修之助『佐渡の百年』etc.を参照。
- つまり、『北小浦民俗誌』の決定版注釈が目指されている。

15

- その為、篠原1990論文や松本1998著書も検討の対象とされている。
- 第二部解題のうち、池田哲也「昭和初期における佐渡の民俗研究体制－倉田一郎の佐渡調査前後－」のp.295に、1936年7月8日に中山徳太郎の別邸での柳田夫妻を含む集合写真(松本三喜夫著書p.74とは別角度)が掲載されており、そのキャプションで、左から二番目を「青柳秀雄」としている; ⇒松本著書p.74の「青柳弘」は誤記で、本人ということ。
- ただ残念ながら、著作の目的の制約によるが、『北小浦民俗誌』が佐渡の郷土研究に与えた影響は問題とされていない; {↑上の池田論考も、同民俗誌の前史のみ}
- また、篠原1990論文のような戦時協力という視点は無い。
 - ↑福田氏が柳田は戦争に批判的だった、と考えている為?

16

(その他、倉田一郎に関する先行文献として...)

- 大間知篤三「倉田一郎君の思い出」, 『日本民俗学大系』13, 1960
- 高桑守史「倉田一郎—その研究と方法」、瀬川清子・植松明石(編)『日本民俗学のエッセンス』ぺりかん社, 1979.
- 戸塚ひろみ「学問で国を濟ふ日—倉田一郎のもとに残された柳田國男の手紙と葉書—」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』165, 2011.
- 林洋平「倉田一郎と語彙研究」, 『民俗学研究所紀要』45, 2021.

17

疑問点4；青柳秀雄が1936.7の“民間伝承の会佐渡支部”設立前後に、この会との接触を差し控えた(p.177)、などとあることの根拠が不明確。

- 同頁に、「佐渡民俗研究会の会員の一部と青柳との間で何か行き違いが生じたのかもしれない」、「何か複雑な事情があったのではないかとと思われる」、と憶測が重ねられる。
- P.178には、「柳田國男などの組織化されたアカデミズムの世界とは次第に立場を異にする」ようになり、1939年頃から佐渡の郷土研究より「一歩退く結果となった」とある。
- P.120には1936年に、「青柳は民間伝承の会に入ったものの、柳田國男やその門下による調査・研究や手法を相容れることができなかったに違いない」、とあるが、どういった根拠で“違いない”のか？；←同年7月に柳田と対面したのに？

18

- これが疑問であることの根拠の一つに、本書pp.164f.に1956年における青木重孝との再会エピソードとして言及される、“小木半島民俗調査”がある。
- これは、新潟県教育庁(教育委員会)による歴史、民俗、考古、地質の総合調査。その報告書が、『**南佐渡 南佐渡学術調査報告書**』(新潟県教委, 1958)。
- そのうち民俗の取り纏めは青木重孝が行ったが、彼はその「あとがき」に次のように書いている。
 - 「これらの探訪にあたり、終始のお世話をくださったのは小木町では、時の教育長村上健次氏、小比叡では青柳秀雄氏、小泊では佐々木清一氏、羽茂村では村上経一郎氏であった」(同報告書p.71；下線は発表者)。
 - なお、本書p.168に同調査執行が1962とあるが、誤り？

19

- さらに青柳は、1961年に新潟県民俗学会の創始者である小林存(ながろう)が亡くなった際、同会の会誌である『高志路』別冊に、「県民俗学界の損失」という追悼文を寄稿している；←文章の中身は本書pp.167f.
- 以上のように、青柳秀雄が1950年代後半から60年代初めに至っても、新潟県内の民俗学関係者と繋がりがあったことは疑いない。
 - 1935年の民間伝承の会入会以降、青柳に『民間伝承』や『高志路』への寄稿が無かったとしても、そのことを以て1930年代後半以降に県内の民俗学関係者から孤立したかのような議論はどうなのか？ あるいは、本に書けないようなしっかりした証拠があるのか？

20

疑問点5；青柳秀雄を含む佐渡の郷土研究者が、九学会連合『佐渡 自然・文化・社会』(1964)にどう反応したか、記載が無い。

■ 九学会連合の共同調査とは；

- 九学会は時期によって参加学会が変わるが、**佐渡調査**(1959-61)当時は、人類学、民族学、民俗学、社会学、考古学、言語学、地理学、宗教学、心理学。
- 中心は**渋沢敬三**(1896-1963)で、佐渡調査の後に逝去。
- 地域に絞った調査以外も行っているが、地域調査としての佐渡調査は、**対馬**(1950-51)、**能登**(1952-53)、**奄美**(1955-57)、に次ぐ4箇所目。
 - ↳refer；坂野徹『フィールドワークの戦後史』(吉川弘文館, 2012) + 福田アジオ『日本の民俗学』(同, 2009)

21

このような問題を立てる背景；

- 発表者がこれまで複数回、**九学会連合能登調査**(1952-53、“本報告書”1955)が地元の研究者、とくに民俗研究者に与えた**負の影響**を指摘してきたことによる；
 - 由谷裕哉「九学会連合能登調査と加能民俗の会」, 『加能民俗研究』42, 2011.
 - 同「九学会連合能登調査と和歌森太郎」, 『加能民俗研究』55, 2024.
 - 同「北陸三県民俗の会(福井・加能・富山)の成果と現状」, 『日本民俗学』321, 2025.
 - ↑とくに、“本報告書”『能登 自然・文化・社会』1955の文献目録における、**中央ー現地**という階梯の表現など。

22

能登調査の“本報告書”1955については....；

- 日本社会学会担当分の輪島市町野などの真宗生活(森岡清美)や七尾市庵の漁村社会(中野卓)、日本民俗学会担当分の石動山と真宗など民間信仰の重層性論(桜井徳太郎)は、現地にほぼ影響を与えず。
- しかし、同じく日本民俗学会担当分の平山敏治郎「民間習俗」は、主に**婚姻前後の習俗**を扱ったもので、同論が始まりではないが、後に能登や石川県全体に関して同種の研究が県内外で少なからず出ることになった。
 - 大間知篤三「フリヤの難題」, 『加能民俗』2, 1950.
 - 平山敏治郎「ヒヨトル嫁」, 『加能民俗』4, 1950.
 - 今村充夫「石川県押野村に於けるウチアゲに就いて」, 『日本民俗学』5-1, 1957.

23

- 大間知篤三「加越能における習入」, 『加能民俗』4-7, 1958
- 天野武「嫁入り婚における初婿入の意義」, 『民俗学論叢』1, 1979, その他。
 - ↑詳細は、由谷裕哉(編)『能登の宗教・民俗の生成』(桂書房, 2022), p.25を参照されたし。

- しかし、特定地域に対する多分野からの共同調査は地元に影響を与え、九学会連合の“本報告書”と同じ1955年に、石川考古学研究会刊扱いの『**石川県羽咋郡旧福野湯周辺総合調査報告書**』が出された。
 - 加能民俗の会の初代会長・**長岡博男**は、佐渡の中山徳太郎と同じく本業医師の休日民俗研究者だったが、同書に寄稿した「盆の火祭り」はこれまでになく力が入っていた。由谷2011稿では、そこに長岡の九学会連合への対抗意識を見た。

24

- 加えて、この報告書の「後語」には発表者の2011稿でも述べたように、石川県考古学研究会の高堀勝善による九学会連合へのルサンチマンに満ちた文言が見られる；
 - 「委員の殆どが中央の学者で占められ、石川県在住の委員や協力員が少なく」....
 - 「地方の研究家を調査に参加させることは、反って足手まといになること、委員の末尾を汚した筆者自身が最もよく了解するところであるが」.....
 - 「僅か両二年の調査で能登の全貌が把握できるものでもなく」....etc.
- 佐渡の場合、地元の地域調査との前後関係は能登と逆になるが、九学会連合の調査前に、新潟県教育庁(県教委)による歴史、民俗、考古、地質の総合調査が行われ、1958年に大部の報告書『南佐渡』が出されたのは前述通り。

25

九学会連合の“本報告”佐渡1964の場合；

- 日本民俗学会担当分の「民俗の諸相」は....；
 - 「婚姻」(大島建彦)、「葬制および墓制」(最上孝敬)、「年中行事」(和田正洲)、「まつり」(萩原龍夫)、「芸能」(本田安次)、「昔話」(浜口一夫)、「漁民の信仰」(亀山慶一)の7項目からなる。写真豊富。
- cf. 新潟県教委『南佐渡』の「南佐渡民俗誌」は....；
 - 村制、居住、稲作、田遊び、麻仕事、回船(1)(2)、遊女、港祭り、漁業、産育、葬式、両墓制、ぼん行事、信仰、念仏、遍路、ことば、の全18項目。こちらも写真掲載。
 - 小地区毎に特徴的なテーマを報告しているが、民俗語彙を項目化しているのは古い感じも+親族・婚姻など欠落。

26

和歌森太郎「佐渡の修験道」について

- 以下、「南佐渡の民俗誌」には無かった観点からの、日本民俗学会担当分の論を二つ。なお、和歌森太郎と九学会連合との関係については、由谷2024稿を参照されたし。
- 和歌森は、佐渡調査に第3年度の1961年のみ参加とのこと。
- 赤泊村の本山派勝蔵院、相川町の同派常学院、同町の当山派金剛院、夷新町の同派北方院などを訪ね、そこに所蔵の文書を翻刻しているのは流石である。
- 現地(県内)からのリプライも；⇒鈴木昭英「佐渡の山岳信仰」鈴木(編)『富士・御嶽と中部霊山』名著出版、1978。
- 他のリプライに、宮本袈裟雄「佐渡の修験道研究-修験道の廃止をめぐる」、『東京教育大学文学部紀要』101, 1975。

27

坪井洋文「南佐渡小木町琴浦の社会と習俗」

- 青柳の住む小木町の集中調査；{←集中調査は『南佐渡』に無し}
- 坪井は、第2年度(1960)と第3年度(1961)の調査に参加。
- 同地区の生業、婚姻、宗教が主な課題。
 - 生業は、水田耕作と畑作に依存。
 - 婚姻については、村内婚が大半で、いわゆる主婦権が確立する前に“センタクガエリ”(嫁の里帰り)がある。
 - 宗教については、年齢階梯的な特徴は無いとしつつ、子どもの盆行事、青年会の関わり、講、地神など。
- とはいえ、“宗教”と言いながら、村の神社や寺院の行事・法要についてほぼ言及されないのは、啞然とさせられる。
 - ↑坪井が宗教研究者でないからか？

28

- 坪井の立論に物足りなさを感じるのは、オーソドックスな民俗学による特定地区に対する調査だからかも.....；
 - 神社や寺院に注目した集中調査としては、日本宗教学会担当分の宮家準・池田昭・柳川啓一・池上広正「真野町四日町区の宗教生活」が詳細をきわめる。
 - 坪井論であまりに検討が不足していた親族関係については、日本民族学協会担当分の村武精一・大胡欽一「小佐渡大川における家族・シンルイ・婚姻」が精緻な分析をしている。
 - しかし、両者とも青柳の小木町と離れた地区の集中調査の為、ここでは執筆者と論考タイトルのみに留める。
- 小木町については他に、日本民族学協会担当分の宮本常一「労働慣行」に、同町大浦についての報告が2頁余りある。
 - あまり時間をかけてない調査、という気がするが？

29

- 実は、宮本常一の九学会連合佐渡調査に関しては、前述した坂野徹2012年書に加え、それに先駆けて佐野眞一『旅する巨人』(文藝春秋, 1996)でも取り上げられている。
 - ↑九学会連合能登調査と比べてリプライの稀少な佐渡調査に関しては、佐野書は良く話題にされる本でもあり、貴重なリプライか？； {←小木町での調査エピソードも}
- 近年では、宮本常一と佐渡に関して次のような論考も。
 - 門田岳久「「離島性」の克服：宮本常一と反転する開発思想」, 『立教大学観光学部紀要』19, 2017.
 - ↳refer; 門田岳久『宮本常一〈抵抗〉の民俗学—地方からの叛逆—』慶應義塾大学出版会, 2023.

30

小括と代案の提示

- 佐渡の郷土研究において、次のような外部との応答があったと考えられる。
 - 1935；青柳秀雄らが民間伝承の会に入会(『民間伝承』3)。
 - 1936.4；鈴木棠三が来島。29日青柳と面会(福田書p.290)。
 - 1936.7；柳田國男が来島。8日青柳らと交流(同上p.295)。
 - 同年；民間伝承の会佐渡支部結成(本書pp.119f.)。
 - 1937.4；倉田一郎が海村調査に来島(5月まで；本書p.127でも言及)。10月にも。
 - 1938.9；青木重孝・中山徳太郎『佐渡年中行事』。
 - 1942.7；鈴木棠三『佐渡島昔話集』。
 - 1944.8；柳田國男・倉田一郎『佐渡海府方言集』。

31

- 1949.4；柳田國男『北小浦民俗誌』
- 1958.5；新潟県教委『南佐渡 南佐渡学術調査報告書』
- 1964.3；九学会連合『佐渡 自然・文化・社会』
- cf. 群馬県の例は1930s主体だったが、新田公拳兵六百年祭(1933)、新田公会設立と行幸(1934)、紀元二千六百年祭(1940)、皇国史観との関わり、などが話題に。
- 佐渡は、柳田の海村調査の一事例となり(1937調査、1949民俗誌刊行)、九学会連合の佐渡調査も(1959-61、1964“本報告書”『佐渡 自然・文化・社会』刊行)。
- ↳ 現地の視点からこれらとの応答を考察するには、本書で青柳秀雄のテキストが明らかにされていない以上、その他の郷土研究者(青木重孝、山本修之助)によるしかない。

32